

## アニー

- 1 「小さく小さく床をのべて  
一人でひっそり寝ておりな  
アニー 俺は海を越えて  
財産財宝いっぱいついで  
すてきな花嫁を連れてくる  
おまえは一文なしだから
- 2 「とはいっても 花嫁のパンを誰が焼く  
花嫁のワインを誰が仕込む  
谷を越えて連れてくる  
すてきな花嫁を誰が迎える」
- 3 「わたしが花嫁のパンを焼き  
花嫁のワインを仕込みましょう  
谷を越えてお連れになる  
すてきな花嫁を迎えましょう」
- 4 「すてきな花嫁を迎えるには  
生娘きむすめでなければならぬ  
外衣ロコにきちんと帯紐おびしめて  
ブロンドの髪はふさふさと」
- 5 「生娘きむすめでもないこのわたしに  
どうして生娘きむすめのふりができましょう  
あなたの子供を七人産んで  
いまもお腹はらに一人いるのに」
- 6 アニーは赤児を腕に抱き  
一人の子供の手をひいて  
お城の高い塔のうえ  
夫の帰りを待ちました
- 7 「登っておいで 登っておいで わたしの長男こしやう  
あちらの海辺をこらんなさい  
おまえのお父さんの花嫁さんが  
やってくるのをこらんなさい」

8 「おりてきて おりてきて お母さん

塔の上からおりてきて

そんなところに立っていたら

落ちやしないかと心配です」

9 アニーは下へ下へおりてきて

夫の船を迎えました

トップマストとメインマストが

銀色にきらきら輝きました

10 アニーは下へ下へおりてきて

花嫁の船を迎えました

トップマストとメインマストが

金色にきらきら輝きました

11 アニーは七人の子供をひき連れて

七人の子供をひき連れて

谷を越えてやってきた

夫と花嫁を出迎えました

12 「ようこそお帰り あなたの館へ

ようこそお帰り あなたの国へ

手に手をとってお連れした

あなたの奥様ともどもに

13 「ようこそ奥様 あなたの広間へ

ようこそ奥様 あなたの部屋へ

ようこそ奥様 あなたの館へ

ここにるのはみなあなたのもの」

14 「ありがとう アニー ありがとう

ほんとうにありがとう

わたしがこれまで出会ったなかで

あなたはわたしの姉に生きうつし

15 「二人の騎士が海を越えてやってきて

姉をさらっていったのです

その騎士の一団と 彼が行く国に  
わざわいあれ」

16 アニーは戸口にナプキンをかけ  
広間にもかけました  
それは涙が流れたときに  
すぐにふきとるためでした

17 アニーは長いテーブルに  
白パンとお酒を出しました  
自分は水を飲みました  
肌をきれいにするためでした

18 アニーは長いテーブルに  
白パンと茶色のパンを出しました  
ふり向いたそのときに  
たちまち涙が流れました

19 アニーは銀の鉤かぎにかけた  
絹のナプキンを取りました  
頬ほと顎あごに流れる涙を  
いつもふきとるためでした

20 男はふり向くたびに  
家来に笑っていました  
「古女房と新妻と  
どちらがよいものかねえ」

21 鐘が鳴ります お祈りです  
みんなおやすみするときです  
男と花嫁は  
二人のお部屋へ引きとりました

22 二人の用事を聞くために  
アニーは近くに床をのべました  
「ああ 何と悲しいこと  
こんな目に会おうとは

23

「もしもわたしの子供らが お城の壁を走り回る  
七匹の子鼠で

そしてわたしが灰色の猫ならば

たちまち子鼠たちを殺してやる

24

「もしもわたしの子供らが 百合の野原を走り回る  
七匹の小兎で

そしてわたしが灰色の獵犬ゆきいぬならば

たちまち小兎を殺してやる」

25

アニーは悲しくすわっていました  
そのうた声のわびしいこと

すすり泣くたびにこぼしました

「わたしをこんな目に会わした男にわざわざいあれ」

26

花嫁がいました「ガウンをつけて  
靴をはき

アニーのお部屋へ行きましょう

何が悲しいのか聞きましょう

27

「どうしたの アニー  
そんなに悲しく嘆くとは

酒樽の輪がはずれたの

それとも白パンがなくなったの

28

「あなたのお父様のお名前は アニー  
あなたのお母様のお名前は

妹様はおありなの アニー

弟様はおありなの アニー」

29

「ウエミス伯がわたしの父  
伯爵夫人がわたしの母

そしてほかに 妹と弟が

わたしの家族」

30

「あなたのお父様のウエミス伯  
それはわたしのお父様

たとえお金がなくなっても

あなたの夫はあなたのもの

「わたしは七隻ななせきの船でやってきた  
あふれんばかりの荷をつんで

みんなあなたにあげましょう

そのうち四隻よっせきは御長男ごちやうなんへの贈物

天の神様に感謝します

生娘きむすめで国へ帰れるとは

(藪下卓郎訳)